

# 半七捕物帳

石燈籠

岡本綺堂

青空文庫



半七老人は或るとき彼のむかしの身分について詳しい話をしてくれた。江戸時代の探偵物語を読む人々の便宜のために、わたしも少しばかりここにその受け売りをして置きたい。

「捕物帳というのは与力や同心が岡っ引らの報告を聞いて、更にこれを町奉行所に報告すると、御用部屋に当座帳のようなものがあつて、書役しよやくが取りあえずこれに書き留めて置くんです。その帳面を捕物帳といっていました」と、半七は先ず説明した。「それから私どものことを世間では御用聞きとか岡っ引とか手先とか

勝手にいろいろの名を付けているようですが、御用聞きというのは一種の敬語で、他からこつちをあがめて云う時か、又はこつちが他を嚇かすおどときに用いることばで、表向きの呼び名は小者こものというんです。小者じゃ幅が利かないから、御用聞きとか目明めあかしとかいうんですが、世間では一般に岡っ引といっていました。で、与力には同心が四、五人ぐらいずつ付いている、同心の下には岡っ引が二、三人付いている、その岡っ引の下には又四、五人の手先が付いているという順序で、岡っ引も少し好い顔になると、一人で七、八人乃至ないし十人ぐらいの手先を使っていました。町奉行から小者即ち岡っ引に渡してくれる給料は一カ月に一分二朱というのが上の部で、悪いのになると一分ぐらいでした。いくら諸式の廉やす

い時代でも一カ月に一分や一分二朱じやあやり切れません。おまけに五人も十人も手先を抱えていて、その手先の給料はどこからも一文だつて出るんじやありませんから、親分の岡っ引が何とか面倒を見てやらなけりやあならない。つまり初めから十露盤そろばんが取れないような無理な仕組みに出来あがつているんですから、自然そこにいろいろの弊害が起つて来て、岡っ引とか手先とかいうととかく世間から蝮まむし扱いにされるようになってしまつたんです。しかし大抵の岡っ引は何か別に商売をやつていました。女房の名前で湯屋をやつたり小料理をやつたりしていましたよ」

そういうわけで、町奉行所から公然認められているのは少数の小者即ち岡っ引だけで、多数の手先は読んで字のごとく、岡っ引

の手先となつて働くに過ぎない。従つて岡つ引と手先とは、自然親分子分の關係をなして、手先は岡つ引の台所の飯を食つていたのであつた。勿論、手先の中にもなかなか立派な男があつて、好い手先をもつていなければ親分の岡つ引も好い顔にはなれなかつた。

半七は岡つ引の子ではなかつた。日本橋の木綿店もめんだなの通い番頭のせがれに生まれて、彼が十三、妹のお糸くめが五つのとときに、父の半兵衛に死に別れた。母のお民は後家ごけを立てて二人の子供を無事に育てあげ、兄の半七には父のあとを継つがせて、もとのお店に奉公させようという望みであつたが、道楽肌の半七は堅氣の奉公を好まなかつた。

「わたくしも不孝者で、若い時には阿母おふくろをさんざん泣かせましたよ」

それが半七の懺悔ざんげであった。肩揚げの下りないうちから道楽の味をおぼえた彼は、とうとう自分の家を飛び出して、神田の吉五郎という岡っ引の子分になった。吉五郎は酒癖のよくない男であったが、子分たちに対しては親切に面倒を見てくれた。半七は一年ばかりその手先を働いているうちに、彼の初陣ういじんの功名をあらわすべき時節が来た。

「忘れもしない天保丑年うしの十二月で、わたくしが十九の年の暮でした」

半七老人の功名話はこうであった。

天保十二年の暦こよみももう終りに近づいた十二月ははじめの陰くもった日であつた。半七が日本橋の大通りをぶらぶらあるいていると、白木の横町から蒼い顔をした若い男が、苦勞ありそうにとぼとぼと出て来た。男はこの横町の菊村という古い小間物屋の番頭であつた。半七もこの近所で生まれたので、子供の時から彼を識しつていた。

「清さん、どこへ……」

声をかけられて清次郎は黙つて会えしやく釈した。若い番頭の顔色はきよようの冬空よりも陰つているのがいよいよ半七の眼についた。「かぜでも引きなすつたかえ、顔色がひどく悪いようだが……」



「いえ、なに、別に」

云おうか云うまいか清次郎の心は迷っているらしかったが、やがて近寄つて来てささやくように云つた。

「実はお菊さんのゆくえが知れないので……」

「お菊さんが……。一体どうしたんです」

「きのうのお午ひるすぎに仲働きのお竹どんを連れて、浅草の観音様へお詣りに行つたんですが、途中でお菊さんにはぐれてしまつて、お竹どんだけがぼんやり帰つて来たんです」

「きのうの午過ぎ……」と、半七も顔をしかめた。「そうして、きようまで姿を見せないんですね。おふくろさんもさぞ心配していなさるだろう。まるで心当りはないんですかえ。そいつはちっ

と変だね」

菊村の店でも無論手分けをして、ゆうべから今朝まで心当りをくま限なく詮索しているが、ちつとも手がかりがないと清次郎は云つた。彼はゆうべ碌々にねむ睡らなかつたらしく、あか紅くうるんだ眼の奥に疲れた瞳ひとみばかりが鋭く光っていた。

「番頭さん。冗談じゃない。おまえさんが連れ出して何処へか隠してあるんじゃないかえ」と、半七は相手の肩を叩いて笑った。

「いえ、飛んでもないことを……」と、清次郎は蒼い顔をすこし染めた。

娘と清次郎とがただの主従関係でないことは、半七も薄々にら睨んでいた。しかし正直者の清次郎が娘をそそのかして家出させる程

の悪法を書こうとも思われなかつた。菊村の遠縁の親類が本郷にあるので、所詮無駄とは思いつながらも、一応は念晴らしにこれから其処へも聞き合わせに行くつもりだと、清次郎は頼りなげに云つた。彼のそそけた鬢びんの毛は師走の寒い風にさびしく戦慄おのいていた。

「じゃあ、まあ試ためしに行つて御覧なさい。わつしもせいぜい気をつけますから」

「なにぶん願います」

清次郎に別れて、半七はすぐに菊村の店へたずねて行つた。菊村の店は四間半の間口で、一方の狭い抜け裏の左側に格子戸の出入り口があつた。奥行きの深い家で、奥の八畳が主人の居間らし

く、その前の十坪ばかりの北向きの小庭があることを、半七はかねて知っていた。

菊村の主人は五年ほど前に死んで、今は女あるじのお寅が一家の締めくくりをしていた。お菊は夫が形見の一粒種で今年十八の美しい娘であった。店では重蔵という大番頭のほかに、清次郎と藤吉の若い番頭が二人、まだほかに四人の小僧が奉公していた。奥はお寅親子と仲働きのお竹と、ほかに台所を働く女中が二人いることも、半七はことごとく記憶していた。

半七は女主人のお寅にも逢った。大番頭の重蔵にも逢った。仲働きのお竹にも逢った。しかしみんな薄暗いゆがんだ顔をして溜息をついているばかりで、娘のありかを探索することに就いて何

の暗示をも半七に与えてくれなかった。

帰るときに半七はお竹を格子の外へ呼び出してささやいた。

「お竹どん。おめえはお菊さんのお供をして行った人間だから、今度の一件にはどうしても係り合いは逃がれねえぜ。内そとによく気をつけて、なにか心当りのことがあつたら、きつとわつしに知らしてくんねえ。いいかえ。隠すと為にならねえぜ」

年の若いお竹は灰のような顔色をしてふるえていた。その嚇しが利いたとみえて、半七があくる朝ふたたび出直してゆくと、格子の前を寒そうに掃いていたお竹は待ち兼ねたように駈けて来た。

「あのね、半七さん。お菊さんがゆうべ帰って来たんですよ」

「帰って来た。そりゃあよかつた」

「ところが、又すぐに何処へか姿を隠してしまつたんですよ」

「そりやあ変だね」

「変ですとも。……そうして、それきり又見えなくなつてしまつたんですもの」

「歸つて来たのを誰も知らなかつたのかね」

「いいえ、わたしも知っていますし、おかみさんも確かに見たんですけれども、それが又いつの間にか……」

「聴く人よりも話す人の方が、いかにも腑に落ちないような顔をしていた。」

「きのうの夕方、こくちよう石町の暮れ六ツが丁度きこえる頃でしたらう」と、お竹はなにか怖い物でも見たように声をひそめて話した。「この格子ががらりと明いたと思うと、お菊さんが黙って、すうっとはいつて来たんですよ。ほかの女中達はみんな台所でお夜食の支度をしている最中でしたから、そこにいたのはわたしだけでした。わたしが『お菊さん』と思わず声をかけると、お菊さんはこつちをちよいと振り向いたばかりで、奥の居間の方へずんずん行つてしまいました。そのうちに奥で『おや、お菊かえ』というおかみさんの声がしたかと思うと、おかみさんが奥から出て来て『お菊はそこらに居ないか』と訊くんでしょう。わたしが『いい

え、存じません』と云うと、おかみさんは変な顔をして『だって、今そこへ来たじやあないか。探して御覧』と云う。わたしも、おかみさんと一緒になつて家うちじゆう中を探して見たんですけれども、お菊さんの影も形も見えないんです。店には番頭さん達もみんないましたし、台所には女中達もいたんですけれども、誰もお菊さんの出はいりを見た者はないと云うんでしょう。庭から出たかと思ふんですけれども、木戸は内からちやんと閉め切つてあるままで、ここから出たらしい様子もないんです。まだ不思議なことは、初めにはいつて来た格子のなかに、お菊さんの下駄が脱いだままになつて残つているじやありませんか。今度は跣足はだしで出て行つたんでしょうか。それが第一わかりませんわ」



「お菊さんはその時にどんな服装なりをしていたね」と、半七はかんがえながら訊いた。

「おとといこの家を出たときの通りでした。黄八丈きはちじょうの着物をきて藤色の頭巾ずきんをかぶって……」

白子屋のお熊が引廻しの馬の上に黄八丈のあわれな姿をさらしてこのかた、若い娘の黄八丈は一時まったくすたれたが、このごろは又だんだんはやり出して、出世前のむすめも芝居で見のお駒を真似るのがちらほらと眼したまについて来た。襟付の黄八丈に緋鹿子ひかのこの帯をしめた可愛らしい下町したまちの娘すがたを、半七は頭のなかに描き出した。

「お菊さんは家を出るときには頭巾をかぶっていたのかね」

「ええ、藤色縮緬ちりめんの……」

この返事は半七を少し失望させた。それから何か紛失物でもあったのかと訊くと、お竹は別にそんなことも無いようだと言った。なにしろ、ほんの僅わずかの間で、おかみさんが奥の八畳の居間に坐っている、襖が細目に明いたらしいので、何ごころなく振り向くと、かの黄八丈の綿入れに藤色の頭巾をかぶった娘の姿がちらりと見えた。驚きと喜びとで思わず声をかけると、襖はふたたび音もなしに閉じられた。娘はどこかへ消えてしまったのである。もしや何処かで非業ひごうの最期さいごを遂げて、その魂が自分の生まれた家へ迷って帰ったのかとも思われるが、彼女は確かに格子をあけてはいつて来た。しかも生きている者の証拠として、泥の付いた下

駄を格子のなかへ遺のこして行つた。

「おととい昨日浅草へ行つた時に、娘はどこかで清さんに逢やあしなかつたか」と、半七はまた訊いた。

「いいえ」

「隠しちやあいけねえ。おめえの顔にちやんと書いてある。娘と番頭は前から打ち合わせがしてあつて、奥山の茶屋か何かで逢つたろう。どうだ」

お竹は隠し切れないでどうとう白状した。お菊は若い番頭の清次郎と疾とうから情交わけがあつて、ときどき外で忍び逢つている。おとといの観音詣りも無論そのため、待ち合わせていた清次郎と一緒にお菊は奥山の或る茶屋へはいった。取り持ち役のお竹はそ

の場をはずして、観音の境内を半はんとぎ時ばかりも遊びあるいていた。それから再び茶屋へ帰つてくると、二人はもう見えなかつた。茶屋の女の話によると、男は一と足先に帰つて、娘はやがて後から出た。茶代は娘が払つて行つた。

「それからわたしもそこらを探して歩いたんですけれども、お菊さんはどうしても見えないんです。もしや先へ帰つたのかと思つて、わたしも急いで家うちへ帰つてくると、家へもやつぱり帰つていないでしょう。内ないしょ所で清さんに訊いて見たんですけれども、あの人も一と足先へ帰つたあとで、なんにも知らないと言うんです。でも、おかみさんにほんとうのことは云えませんか、途中ではぐれたことにしてあるんですが、清さんもわたしも、おとと

いから内々どんなに心配しているか知れないんです。ゆうべ帰つて来て、やれ嬉しやと思うとすぐにまた消えてしまつて……。一体どうしたんだか、まるで見当が付きません」

おろおろ声でお竹がささやくのを、半七は黙つて聴いていた。

「なに、今に判るだろう。おかみさんにも、番頭さんにも、あまり心配しねえように云つて置くがいい。きようはこれで帰るから」

半七は神田へ歸つて親分にこの話をする、吉五郎は首をかしながら、その番頭が怪しいぜと云つた。しかし半七は正直な清次郎を疑う気にはなれなかつた。

「いくら正直だつて、主人のむすめと不埒を働くような野郎だもの、何をするか判るもんか。あした行つたらその番頭を引っぱた

いてみる」と、吉五郎は云った。

その明くる朝の四ツ（十時）頃に半七が重ねて菊村の店へ見廻りにゆくと、店の前には大勢の人が立っていた。大勢は何かひそひそ囁きながら好奇と不安の眼をけわしくして内を覗き込んでいた。近所の犬までが大勢の足の下をくぐって仔細ありげにうろついていた。裏へまわって格子をあけると、狭い沓くつぬぎ脱は草履や下駄で埋められていた。お竹は泣き顔をしてすぐ出て来た。

「おい。何かあったのかい」

「おかみさんが殺されて……」

お竹は声を立てて泣き出した。半七もさすがに呆あっけ気に取りられた。

「誰に殺されたんだ」

返事もしないでお竹はまた泣き出した。賺<sup>すか</sup>して嚇<sup>おど</sup>してその仔細をきくと、女あるじのお寅はゆうべ何者にか殺されたのである。表向きは何者か判らないと云っているが、実は娘のお菊が手をくだしたのである。お竹はたしかにそれを見たと言った。お竹ばかりでなく、女中のお豊もお勝も、おなじくお菊の姿を見たのとこのであつた。

果たしてそれが偽りでなければ、お菊は云うまでもなく親殺しの罪人である。事件は非常に重大なものとなつて半七の前にあらわれた。今まではさのみ珍らしくもない町家の娘と奉公人の色事と多寡<sup>たか</sup>をくくつていた半七は、この重大事件にぶつかつて少し面喰<sup>か</sup>らつた。

「だが、こういう時に腕を見せなけりやあいけねえ」と、年の若い彼は努めて勇氣をふるい興した。

娘はさきおととい行くえ不明となった。それがおとといの晩、ふらりと帰つて来て、すぐに又その姿を隠してしまった。そうしてゆうべまた帰つて来たかと思うと、今度は母を殺して逃げた。これには余程こみいった事情がまつわつていなければならぬと想像された。

「そうして、娘はどうした」

「どうしたか判らないんです」と、お竹はまた泣いた。

かれが泣きながら訴えるのを聞くと、ゆうべも前夜とおなじ燈ひともし頃に、お菊はわが家へおなじ形を現わした。今度はどこか



らはいって来たか判らなかつたが、奥でおかみさんが突然に「おや、お菊……」と叫んだ。つづいておかみさんが悲鳴をあげた。お竹とほかの女中二人がおどろいて駈けつけた時に、縁側へするりと抜け出してゆくお菊のうしろ姿が見えた。お菊はやはり黄八丈を着て、藤色の頭巾をかぶっていた。

三人はお菊を取押えるよりも、まずおかみさんの方に眼を向けなければならなかつた。お寅は左の乳の下を刺されて虫の息で倒れていた。畳の上には一面に紅い泉が流れていた。三人はきやつと叫んで立ちすくんでしまった。店の人達もこの声におどろいてみんな駈け付けて来た。

「お菊が……お菊が……」

お寅は微かにこう云つたらしいが、その以上のことは誰の耳にも聴き取れなかった。彼女は大勢が唯うろたえているうちに息を引き取ってしまった。町役人連名で訴えて出ると、すぐに検視の役人が来た。お寅の傷口は鋭い匕あいくち首あいくちのようなもので深くえぐられていたことが発見された。

家内の者はみな調べられた。うっかりしたことを口外して店の暖簾のれんに疵を付けてはならないという遠慮から、誰も下手人げしゆにんを知らないと答えた。しかし娘のお菊が居合わせないということが役人たちの注意をひいたらしい。お菊と情交わけのあることを発見された清次郎は、その場からすぐに引つ立てられて行つた。お竹にはまだ何の沙汰さたもないが、いずれ町内預けになるだろうと、彼女は

生きている空もないように恐れおののいていた。

「飛んだことになったもんだ」と、半七は思わず溜息をついた。

「わたしはどうなるでしょう」と、お竹はまきぞえの罪がどれほどに重いかをひたすらに恐れているらしかった。そうして「わたし、もういつそ死んでしまいたい」などと狂女のように泣き悲しんでいた。

「馬鹿云つちやあいけねえ。おめえは大事の証人じゃねえか」と、半七は叱るように云った。

「いずれ御用聞きが一緒に来たろうが、誰が来た」

「なんでも源太郎さんとかいう人だそうです」

「むむ、そうか。瀬戸物町か」

源太郎は瀬戸物町に住んでいる古顔の岡つ引で、好い子分も大勢もっている。一番こいつの鼻をあかして俺の親分に手柄をさしてやりたいと、半七の胸には強い競争の念が火のように燃え上がった。併しどこから手を着けていいのか、彼もすぐには見当が付かなかつた。

「ゆうべも娘は頭巾をかぶっていたんだね」

「ええ。やっぱりいつもの藤色でした」

「さっきの話じゃあ、娘はどさくさまぎれに縁側へ抜け出して、それから行くえが知れねえんだね。おい、木戸をあけておいらを庭口へ廻らしてくれねえか」と、半七は云つた。

お竹が奥へ取次いだとみえて、大番頭の重蔵が眼をくぼませて

出て来た。

「どうも御苦勞様でございます。どうぞ直ぐにこちらへ……」

「飛んだこつてしたね。お取り込みの中へずかずかはいるのも良くねえから、すぐに庭口へ廻ろうと思つたんですが、それじゃあ御免を蒙ります」

半七は奥へ案内されて、お寅の血のあとがまだ乾かない八畳の居間へ通つた。彼がかねて知っている通り、縁側は北に向つて、前には十坪ばかりの小庭があつた。庭には綺麗に手入れが行きとどいていて、雪釣りの松や霜除けの芭蕉が冬らしい庭の色を作つていた。

「縁側の雨戸は開いていたんですか」と、半七は訊いた。

「雨戸はみんな閉めてあつたんですが、その手水鉢ちようずばちの前だけがいつも一枚細目にあけてありますので……」と、案内して来た重蔵は説明した。「勿論それは宵の内だけで、寝る時分にはぴったりに閉めてしまいます」

半七は無言で高い松の梢こずえをみあげた。闖入者はこの松を伝つて来たものらしくも思われなかつた。忍び返しの竹にも損所はなかつた。

「ずいぶん高い塀ですね」

「はい、ゆうべもお役人衆が御覧になつて、この高い塀を乗り越して来るのは容易でない。と云つて、梯子はしごをかけた様子もなし、松を伝つて来たらしくも思われぬ。これは庭口から忍び込んだ

のではあるまいと仰しやいました。併しどこからはいったにしましても、出る時はこの庭口から出たに相違ないように思われますが、木戸の錠は内から固くおろしたままになつていますので、何処をどうして出て行つたかさっぱり判りません」と、重蔵は陰つた眼をいよいよ陰らせて、無意味にそこらを見廻していた。

「左様さ。忍び返しにも疵をつけず、松の枝にもさわらずに、この高塀を乗り越すというのは生なま優やさしいことじゃあねえ」

どう考えても、これは町家の娘などに出来そうな芸ではなかつた。曲者はよほど経験に富んだ奴に相違ないと半七は鑑定した。併しその場へ駈けつけた三人の女は、たしかにお菊のうしろ姿を見たという。それには何かの錯あや誤まりがなければならぬと彼は又

かんがえた。

彼は更に念のために、庭下駄を穿はいて狭い庭の隅々を見まわると、庭の東の隅には大きい石燈籠が立っていた。よほど時代が経っているように見えて、笠も台石も蒼黒い苔こけのころもに隙き間なく包まれていた。一種の湿気しつけを帯びた苔の匂いが、この老舗しこせの古い歴史を語るようにも見えた。

「好い石燈籠だ。近頃ちかごろにこれをいじりましたか」と、半七は何げなく訊いた。

「いいえ、昔から誰も手を着けたことはありません。こんなに見事に苔が付いているから、滅多めったにさわっちゃいけないと、お内儀かみさんからもやかましく云われていますので……」



「そうですね」

滅多にさわることを禁じられているという古い石燈籠の笠の上に、人の足あとが微かに残っていることを、半七はふと見つけ出したのであった。あつい青苔の表は小さい爪先の跡だけ軽く踏みにじられていた。

三

苔に残っている爪先の跡はちいさかった。男ならば少年でなければならぬ。半七はどうも女の足跡らしいと認めた。この曲者はよほど経験に富んだ奴と想像していた半七の鑑定は外れたらしはず

い。女とすればやはりお菊であろうか。たとい石燈籠を足がかりにしても、町育ちの若い娘がこの高塀を自由自在に昇り降りすることは、とても出来そうには思われなかつた。

半七はなにを考えたか、すぐに菊村の店を出て、現代の浅草公園第六区を更に不秩序に、更に幾倍も混雑させたような両国の広小路に向つた。

もうかれこれ午頃<sup>ひる</sup>で、広小路の芝居や寄席も、向う両国の見世物小屋も、これからそろそろ囃<sup>はや</sup>し立てようとする時刻であつた。むしろを垂れた小屋のまえには、弱々しい冬の日が塵埃<sup>ほこり</sup>にまみれた絵看板を白つぽく照らして、色のさめた幟<sup>のぼり</sup>が寒い川風にふるえていた。列<sup>なら</sup>び茶屋の門<sup>かど</sup>の柳が骨ばかりに痩せているのも、今年の

冬が日ごとに暮れてゆく暗い霜枯れの心持を見せていた。それでも場所柄だけに、どこからか寄せて来る人の波は次第に大きくなって来るらしい。その混雑の中をくぐりぬけて、半七は列び茶屋の一軒にはいった。

「どうだい。相変らず繁昌かね」

「親分、いらつしやい」と、色の白い娘がすぐに茶を汲くんで来た。

「おい、姐さん。早速だが少し聞きてえことがあるんだ。あの小屋に出ている春風小柳こりゆうという女の軽業師かるわざし、あいつの亭主は何とといったつけね」

「ほほほほ。あの人はまだ亭主持ちじゃありませんわ」

「亭主でも情夫いろでも兄弟でも構わねえ。あの女に付いている男は

誰だっけね」

「金さんのこつてすか」と、娘は笑いながら云った。

「そう、そう。金次といったっけ。あいつの家は向う両国だね。

小柳も一緒にいるんだろう」

「ほほ、どうですか」

「金次は相変らず遊んでいるだろう」

「なんでも元は大きい呉服屋に奉公していたんだそうですが、小柳さんのところへ反物を持って行ったのが縁になって……。小柳さんよりずっと年の若い、おとなしそうな人ですよ」

「ありがてえ。それだけ判りやあ好いんだ」

半七はそこを出て、すぐそばの見世物小屋にはいった。この小

屋は軽業師の一座で、舞台では春風小柳という女が綱渡りや宙乗りのきわどい曲芸を演じていた。小柳は白い仮面めんをかぶったような厚化粧をして、せいぜい若々しく見せているが、ほんとうの年齢しはもう三十に近いかも知れない。墨で描いたららしい濃い眉と、紅を眼縁まぶたにぼかしたらしい美しい眼とを絶えず働かせながら、演技中にも多数の見物にむかつて頻りに卑しい媚こびを売っている。それがたまらなく面白いもののように、見物は口をあいてみとれていた。半七はしばらく舞台を見つめていたが、やがて又ここを出て向う両国へ渡った。

駒こまとめ止橋の獣肉店ももんじいやに近い路地のなかに、金次の家のあることを探しあてて、半七は格子の外から二、三度声をかけたが、中で

は返事をする者もなかった。よんどころなしに隣りの家へ行つて訊くと、金次は家を明けつ放しにして近所の銭湯せんとうへ行つたらしいとのことであつた。

「わたしは山の手からわざわざ訪ねて来た者ですが、そんなら帰るまで入口に待っています」

隣りのおかみさんに一応ことわつて、半七は格子の中へはいつた。上がりかまち框に腰をかけて煙草を一服すつているうちに、かれはふと思ひ付いて、そつと入口の障子を細目にあけた。内は六畳と四畳半の二間で、入口の六畳には長火鉢が据えてあつた。次の四畳半には炬燵こたつが切つてあるらしく、掛け蒲団の紅い裾がぞんざいに閉めた襖の間からこぼれ出していた。

半七は上がり框から少し伸びあがつて窺うと、四畳半の壁には黄八丈の女物が掛かっているらしかった。彼は草履をぬいでそつと内へ這い込んだ。四畳半の襖の間からよく視ると、壁にかかっている女の着物は確かに黄八丈で、袖のあたりがまだ湿ぬれているらしいのは、おそらく血の痕を洗つて此処にほしてあるものと想像された。半七はうなずいて元の入口に返つた。

その途端に溝どぶ板いたを踏むあしおとが近づいて、隣りのおかみさんに挨拶する男の声聞きこえた。

「留守に誰か来ている。ああ、そうですか」

金次が帰つて来たなと思ううちに、格子ががらりとあいて、半七とおなじ年頃の若い小粋な男がぬれ手拭をさげてはいつて来た。

金次はこのごろ小博奕ぼくちなどを打ち覚えて、ぶらぶら遊んでいる男で、半七とはまんざら識らない顔でもなかった。

「やあ、神田のあにい大哥ですか。お珍らしゆうございますね。まあお上がんなさい」

相手がただの人と違うので、金次は愛想よく半七を招じ入れて長火鉢の前に坐らせた。そうして、時候の挨拶などをしている間にも、なんとなく落ち着かない彼の素振りが半七の眼にはありありと読まれた。

「おい、金次。俺あ初めにおめえにあやまって置くことがあるんだ」

「なんです、大哥。改まってそんなことを……」



「いや、そうでねえ。いくら俺が御用を勤める身の上でも、ひとの家へ留守に上がり込んで、奥を覗いたのは悪かった。どうかまあ、堪忍してくんねえ」

火鉢に炭をついでいた金次はたちまち顔色を変えて、唾おしのように黙ってしまった。彼の手に持っている火箸は、かちかちと鳴るほどにふるえた。

「あの黄八丈は小柳のかい。いくら芸人でもひどく派手な柄を着るじゃあねえか。尤もつともおめえのような若い亭主をもつていちやあ、女はよつぽど若作りにしにやあなるめえが……。ははははは。おい、金次、なぜ黙っているんだ。愛嬌のろけのねえ野郎だな。受け賃に何かおごつて、小柳の惚気のろけでも聞かせねえか。おい、おい、なん

とか返事をしろ。おめえも年上の女に可愛がられて、なにから何まで世話になつてゐる以上は、たとい自分の氣に濟まねえことでも、女がこうと云やあ、よんどころなしに片棒かつぐというような苦しい破目はめがねえとも限らねえ。そりやあ俺も万々察してゐるから、出来るだけのお慈悲は願つてやる。どうだ、何もかも正直に云つてしまえ」

くちびるまで真つ蒼になつてふるえていた金次は、お押し潰つぶされ  
たように畳に手を突いた。

「あにい大哥、なにもかも申し上げます」

「神妙によく云つた。あの黄八丈は菊村の娘のだらうな。てめえ  
一体あの娘をどこから連れて来た」

「わたしが連れて来たんじゃないんです」と、金次は哀れみを乞うような悲しい眼をして、相手の顔をそつと見上げた。「実はさきおとといの午ひるまえに、小柳と二人で浅草へ遊びに行ったんです。酔うとあいつの癖で、きようはもう商売を休むというのを、無理になだめて帰ろうとしても、あいつがなかなか承知しないんです。もつともあんな派手な稼業はしていても、錢遣いがあらいのと、私がこのごろ景気が悪いんで、方々に無理な借金はできる。この歳の暮は大御難おおごなんで、あいつも少し自棄やけになつていようですか。仕方なしにお守もりをしながら午過ぎまで奥山あたりをうろついていると、或る茶屋から若い番頭が出てくる。つづいて小綺麗な娘が出て来ました。それを小柳が見て、あれは日本橋の菊村の娘

だ。おとなしいような顔をしていながら、こんなところで番頭と  
出会いをしていやあがる。あいつを一番食い物にしてやろうと：  
…」

「小柳はどうして菊村の娘ということを知っていたんだ」と、半  
七は喙くちをいれた。

「そりやあ時々には紅や白粉を買いに行くからです。菊村は古い店  
ですからね。そこで私はすぐに駕籠を呼びに行きました。そのあ  
いだ何と云って誘って来たのか知りませんが、とうとう其の娘を  
馬道うまみちの方へ引つ張り出して来たんです。駕籠は二挺で、小柳と  
娘が駕籠に乗って先へ行つて、わたしは後からあるいて帰りまし  
た。帰ってみると、娘は泣いている。近所へきこえると面倒だか

ら、猿轡さるぐつわを嵌はめて戸棚のなかへ押し込んでおくと小柳が云うんです。あんまり可哀そうだとは思いましたが、ええ意気地のねえ、何をぐずぐずしているんだねと、あいつが無暗むやみに劍突けんつを食わせるもんですから、わたしも手伝つて奥の戸棚へ押し込んでしまいました」

「小柳という奴は、よくねえ女だということは、おれも前から聞いていたが、まるで一つ家のばあだな。それからどうした」

「その晩すぐ近所の山女やまぜげん銜を呼んで来て、潮来いたこへ年一杯四十両ということに話がきまりました。安いもんだが仕方がないというので、あくる朝、駕籠に乗せて女銜と一緒に出してやりましたが、その女銜の帰らないうちは一文もこつちの手にはいらぬ。なに

しろもう十二月の声を聞いてからは、毎日のようにいろいろの鬼が押し寄せてくる。苦しまぎれに小柳は又こんなことを考え出したのです。娘を潮来へやるときに、売物には花とかいうんで、着ていた黄八丈を引っぱがして、小柳のよそ行きと着換えさせてやったもんですから、娘の着物はそっくりこつちに残っている」

「むむ。その黄八丈の着物と藤色の頭巾で、小柳が娘に化けて菊村へ忍び込んだな。やっぱり金を取るつもりか」

「そうです」と、金次はうなずいた。「金は手箱に入れておふくろの居間にしまつてあるということは、娘をおどして置いて置いたんです」

「それじゃあ始めからその積りだったんだらう」

「どうか判りませんが、小柳は苦しまぎれによんどころなく斯んなことをするんだと云っていました。だが、おとといの晩は巧く行かないで、すごすご帰って来ました。今夜こそはきつと巧くやつて来ると云つて、ゆうべも夕方から出て行きましたが……。やっぱり手ぶらで帰つて来て、『今夜もまたやり損じた。おまけに嬬かかあが大きな声を出しやあがつたから、自棄やけになつて土手つ腹をえぐつて来た』と、こう云うんです。大哥の前ですが、わたしはふるえて、しばらくは口が利けませんでしたよ。袖に血が付いているのを見ると嘘じゃあない。飛んでもないことをしてくれたいと思つていますと、それでも当人は澄ましたもので『なあに、大丈夫さ。この頭巾と着物が証拠で、世間じゃあ娘が殺したと思つて

いるに相違ない』と云っているんです。そうして、着物の血を洗つて、あすこへほして、きょうも相変らず小屋へ出て行きました」

「いい度胸だな。おめえの情婦いろにやあ過ぎ物だ」と、半七は苦笑いをした。「だが、正直に何もかもよく云つてくれた。おめえも飛んだ女に可愛がられたのが運の尽きだ。小柳はどうで獄門だが、おめえの方は云い取り次第で、首だけは繋がるに相違ねえ。まあ、安心していろ」

「どうぞ御慈悲を願います。わたしは全く意気地のない人間なんです、ゆうべもおちおち寝られませんでした。大哥の顔を一と目見た時に、こりやあもういけねえと往生してしまいました。あの女には義理が悪いようですけれども、私のような者はこうして何も



かもすつかり白状してしまつた方が、胸が軽くなつて却つて好う  
ございますよ」

「じゃあ氣の毒だが、すぐに神田の親分の所まで一緒に来てくれ  
どの道、当分は娑婆しやばは見られぬえから、まあ、ゆつくり支度をし  
て行くがいいや」

「ありがとうございます」

「真つ昼間だ。近所の手前もあるだろう。繩は勘弁してやるぜ」  
と、半七は優しく云つた。

「ありがとうございます」

金次は重ねて礼を云つた。かれの眼は意気地なくうるんでいた。  
おたがい若い身体だ。こう思うと半七は、自分のとりことな

つて牽ひかれて行くこの弱々しい若い男がいじらしくてならなかつた。

## 四

半七の報告を聴いて、親分の吉五郎は金杉の浜で鯨をつかまえたほかに驚いた。

「犬もあるけば棒にあたると云うが、手前もうろうろしているうちに、ど偉いことをしやがったな。まだ駈け出しだと思っていたら油断のならねえ奴だ。いい、いい、なにしろ大出来だ、てめえの骨を盗むような俺じゃあねえ。てめえの働きはみんな旦那方に

申し立ててやるからそう思え。それにしても、その小柳という奴を早く引き挙げてしまわなけりやならねえ。女でも生けつぷてえ奴だ。なにをするか知れねえから、誰か行つて半七を助<sup>す</sup>けてやれ」

物馴れた手先ふたりが半七を先に立てて再び両国へむかつたのは、短い冬の日ももう暮れかかつて、見世物小屋がちようど閉<sup>は</sup>ねる頃であつた。二人は外に待つていて、半七だけが小屋へはいると、小柳は楽屋で着物を着替えていた。

「わたしは神田の吉五郎のところから来たが、親分がなにか用があると云うから、御苦労だがちよつと来てくんねえ」と、半七は何げなしに云つた。

小柳の顔には暗い影が翳<sup>さ</sup>した。しかし案外おちついた態度で寂

しく笑った。

「親分が……。なんだか忌いやですわねえ。なんの御用でしょう」

「あんまりおめえの評判が好いもんだから、親分も乙な気になつたのかも知れねえ」

「あら、冗談は措おいて、ほんとうに何でしょう。お前さん、大抵知っているんでしよう」

衣装葛籠つづらにしなやかな身体をもたせながら、小柳は蛇のような眼をして半七の顔を窺うかがっていた。

「いや、おいらはほんの使い奴やつこだ。なんにも知らねえ。なにしろ大して手間を取らせることじゃあるめえから、世話を焼かせねえで素直に来てくんねえ」

「そりやあ参りますとも……。御用とおつしやりやあ逃げ隠れは出来ませんからね」と、小柳は煙草入れを取り出してしずかに一服すった。

隣りのおででこ芝居では打出しの太鼓がきこえた。ほかの芸人たちも一種の不安に襲われたらしく、息を殺して遠くから二人の問答に耳を澄ましていた。狭い楽屋の隅々は暗くなった。

「日が短けえ。親分も気が短けえ。ぐずぐずしていると俺まで叱られるぜ。早くしてくんねえ」

と、半七は焦れ<sup>じ</sup>ったそうに催促した。

「はい、はい。すぐにお供します」

ようやく楽屋を出て来た小柳は、その暗いかげにも二人の手

先が立っているのを見て、くやしそうに半七の方をじろりと睨にらんだ。

「おお、寒い。日が暮れると急に寒くなりますね」と、彼女は両袖を搔かきあわせた。

「だから、早く行きねえよ」

「なんの御用か存じませんが、もし直きに帰して頂けないと困りますから、家へちうちよいと寄らして下さるわけには参りますまいか」

「家へ帰ったつて、金次はいねえぞ」と、半七は冷やかに云った。

小柳は眼を瞑とじて立ち止まった。やがて再び眼をあくと、長い睫毛まつげには白い露が光っているらしかった。

「金さんは居りませんか。それでもあたしは女のことですから、

少々支度をして参りとうございますから」

三人に囲まれて、小柳は両国橋を渡った。彼女はときどきに肩をふるわせて、遣<sup>や</sup>る瀬<sup>せ</sup>ないように啜<sup>すす</sup>り泣きをしていた。

「金次がそんなに恋しいか」

「あい」

「おめえのような女にも似合わねえな」

「察してください」

長い橋の中ほどまで来た頃には、河岸<sup>かし</sup>の家々には黄いろい灯のかげが疎<sup>まば</sup>らにきらめきはじめた。大川の水の上には鼠色の煙りが浮かび出して、遠い川下が水明かりで薄白いのも寒そうに見えた。橋番の小屋でも行燈に微かな蠟燭の灯を入れた。今夜の霜を予想

するように、御船蔵おふなぐらの上を雁の群れが啼いて通った。

「もしあたしに悪いことでもあるとしたら、金さんはどうなるでしょうね」

「そりやあ当人の云い取り次第さ」

小柳は黙って眼を拭いていた。と思うと、彼女はだしぬけに叫んだ。

「金さん、堪忍しておくれよ」

そばにいる半七を力まかせに突き退けて、小柳は燕つばめのように身をひるがえして駈け出した。さすがは軽業師だけにその捷業はやわざは眼にも止まらない程であつた。彼女は欄干に手をかけたかと思つてもなく、身体はもうまつさかさまに大川の水底に吞まれていた。



「畜生！」と、半七は齒を噛んだ。

水の音を聞いて橋番も出て来た。御用という名で、すぐに近所の船頭から舟を出させたが、小柳は再び浮き上がらなかつた。あくる日になって向う河岸の百本杭に、女の髪がその昔の浅草海苔のりのように黒くからみついているのを発見した。引き揚げて見ると、その髪の持ち主は小柳であつたので、凍つた死体は河岸の朝霜に晒さらされて検視を受けた。女の軽業師はとうとう命の綱を踏み外してしまつた。それが江戸中の評判となつて、半七の名もまた高くなつた。

菊村ではすぐ人をやって、まだ目見得中めみえのお菊を無事に潮来から取り戻した。

「今考えると、あの時はまるで夢のようでございました。清次郎は一と足先に帰ってしまつて、わたくしはなんだか寂しくなつたものですから、お竹の帰ってくるのを待ち兼ねて、なんの気なしに表へ出ますと、大きい樹の下に前から顔を識っている軽業師の小柳が立っていて、清さんが今そこで急病で倒れたからすぐに来てくれと云うのでございます。わたくしはびっくりして一緒に行きますと、清さんは駕籠でお医者の家へかつぎ込まれたから、お前さんも後から駕籠で行つてくれと無理やりに駕籠に乗せられて、やがて何処だか判らない薄暗い家へ連れ込まれてしまつたのでございませう。そうすると、小柳の様子が急に變つて、もう一人の若い男と一緒に、わたくしを散々ひどい目に逢わせまして、それか

ら又遠いところへ送りました。わたくしはもう半分は死んだ者のように茫ぼうとなつてしまいました、なにをどうしようという知恵も分ぶん別べつも出ませんでした」と、お菊は江戸へ歸つてから係り役人の取り調べに答えた。

番頭の清次郎は単に「叱り置く」というだけで赦ゆるされた。

小柳は自滅して仕置を免かれたが、その死に首はやはり小塚ツ原かに梟かけられた。金次は同罪ともなるべきものを格別の御慈悲を以て遠島申し付けられて、この一件は落らく着ちやくした。

「これがまあ私の売出す始めでした」と、半七老人は云つた。

「それから三、四年経つうちに、親分の吉五郎は霍かく乱らんで死にま

した。その死にぎわに娘のお仙と跡式一切をわたくしに譲つて、どうか跡あとを立ててくれろという遺言があつたもんですから、子分たちもとうとうわたくしを担かつぎ上げて二代目の親分ということにしてしまいました。わたくしが一人前の岡っ引になつたのはこの時からです。

その時にどうして小柳に目串めぐしを差したかと云うんですか。そりやあ先刻さつきもお話し申した通り、石燈籠の足跡からです。苔に残つている爪先がどうしても女の足らしい。と云つて、大抵の女がある高塀むぞうを無雑作むぞうに昇り降りすることが出来るもんじゃあない。よほど身体の軽い奴でなければあならないと思つているうちに、ふいと軽業師ということを思い付いたんです。女の軽業師は江戸に

もたくさんありません。そのなかでも両国の小屋に出ている春風小柳という奴はふだんから評判のよくない女で、自分よりも年の若い男に入れ揚げているということを知っていましたから、多分こいつだろうとだんだん手繰って行くと、案外に早く婿が明いてしまったんです。金次という奴は伊豆の島へやられたんですが、その後なんでも赦しやに逢って無事に帰って来たという噂を聞きました。

菊村の店では番頭の清次郎を娘の躰にして、相変らず商売をしていました。が、いくら老舗しにせでも一旦ケチが付くとどうもいけないものを見て、それから後は商売も思わしくないので、江戸の末に芝の方へ引越してしまいました。今はどうなったか知り

ません。

どつちにしても助からない人間じゃありますけれども、小柳を大川へ飛び込ましたのは残念でしたよ。つまりこっちの油断です。つかまえるまでは気が張っていますけれども、もう捕まえてしまうと誰でも気がゆるむものですから、油断して縄抜けなんぞを食うことが時々あります。

まだ面白い話はないかと云うんですか。自分の手柄話ならば幾らもありますよ。はははは。その内にまた遊びにいらっしやい」

「ぜひ又話して貰いに来ますよ」

わたしは半七老人と約束して別れた。







## 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

1997（平成9）年3月25日20刷発行

※誤植の疑われる「薄団」は、「半七捕物帳 巻の一」筑摩書房、1998（平成10）年6月25日初版第1刷発行、1998（平成10）年10月15日初版第2刷発行、「半七捕物帳【続】」大衆文学館、講談社、1997（平成9）年3月20日第1刷発行がともに「蒲団」としていることを確認しました。

入力：砂場清隆

校正：大野晋

2002年5月15日作成

2012年6月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 石燈籠

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>